

# ふるさとのお話

## 中里の慶昌院の幽霊

中里一丁目に慶昌院というお寺があります。この寺は、弘仁十年（八一九年）弘法大師が建てたといわれ、昔は天念寺と呼んだと伝えられています。今回は、この慶昌院に伝わる幽霊のお話です。



△成田慶昌の墓



### お化けの出るお寺

江戸時代初めのことです。各地をめぐっていた駿府の存鯨和尚は、荒れはてていた天念寺を見て、そのわけを村人に尋ねました。村人は「この寺にはお化けが出るので、だれも寄りつきません。お化けを退治してください」と言いました。

その晩、和尚はお堂で坐禅を組んでお化けの出るのを待ちました。草木も眠る丑三つどき（真夜中）、怪しい影が和尚に近づきました。「わしは、存鯨という坊主だが、そこにいるのはだれか」と静かに尋ねました。あやしい影は「あなたは、迷えるものを救い、成仏できるように導いてくださるか」と言いました。和尚は「しかり」と答えました。

鬼の姿をした怪しい影は、たちまち人の姿になって、次のように和尚にたのみました。「私は源頼朝公の家来で、成田

慶昌という者です。私の兄の曾我兄弟は、親のかたきを討ちました

が、殺されました。私も首をはねられるに違いないと思ったので、切腹しました。死骸は松の根元に埋められ祭られましたが、戦国の世となり寺は荒れてしまいました。どうぞ、私が成仏できるような寺を再興してください」

和尚が寺の再建を約束すると、成田慶昌の姿は消えました。人々は改めて、ていねいに葬り、供養しました。

### 子供たちに伝えたい

中里一丁目の山田とらじさん（七十二歳）は、「毎年三月二十一日に、弘法さんのお祭りと一緒に供養しています。年寄りしか話を知らなくなってきたので、子供たちに伝えていきたいね」と語ってくれました。



▷山田さん

ました。

## 地名の由来

（今泉地区）

### 鍛冶屋瀬古



今泉の鍛冶町は、以前鍛冶屋瀬古と呼ばれました。瀬古は勢子村（今泉村の古い村名）のセコと同じ音なので、野鍛冶がいるところという意味で鍛冶屋瀬古と呼んだのでしよう。

江戸時代、かじ屋が四、五軒あって繁盛していたということです。

この地区は、善徳寺城があった跡にできた集落で、早くから開けた地区でした。

### こちら編集室

ものぐさなお父さんにとって「お父さんどこかへ連れてって」という声は耳が痛いもの。そこで、お勧めするのが博物館の「折り紙」展。手近で金がかからず、おまけに涼しい。作品は昔懐かしいものから芸術と呼ばれるものまですばらしい。鶴やゴリラなど親子で楽しめます。八月三十一日まで。

### 新市二十周年記念行事

クラシック音楽編  
☆NHK交響楽団演奏会 ペートーベン「運命」ほか 十月二十九日（水）富士文化センター  
☆市民大音楽会 ペートーベン第九「合唱」十一月二十九日（土）富士文化センター

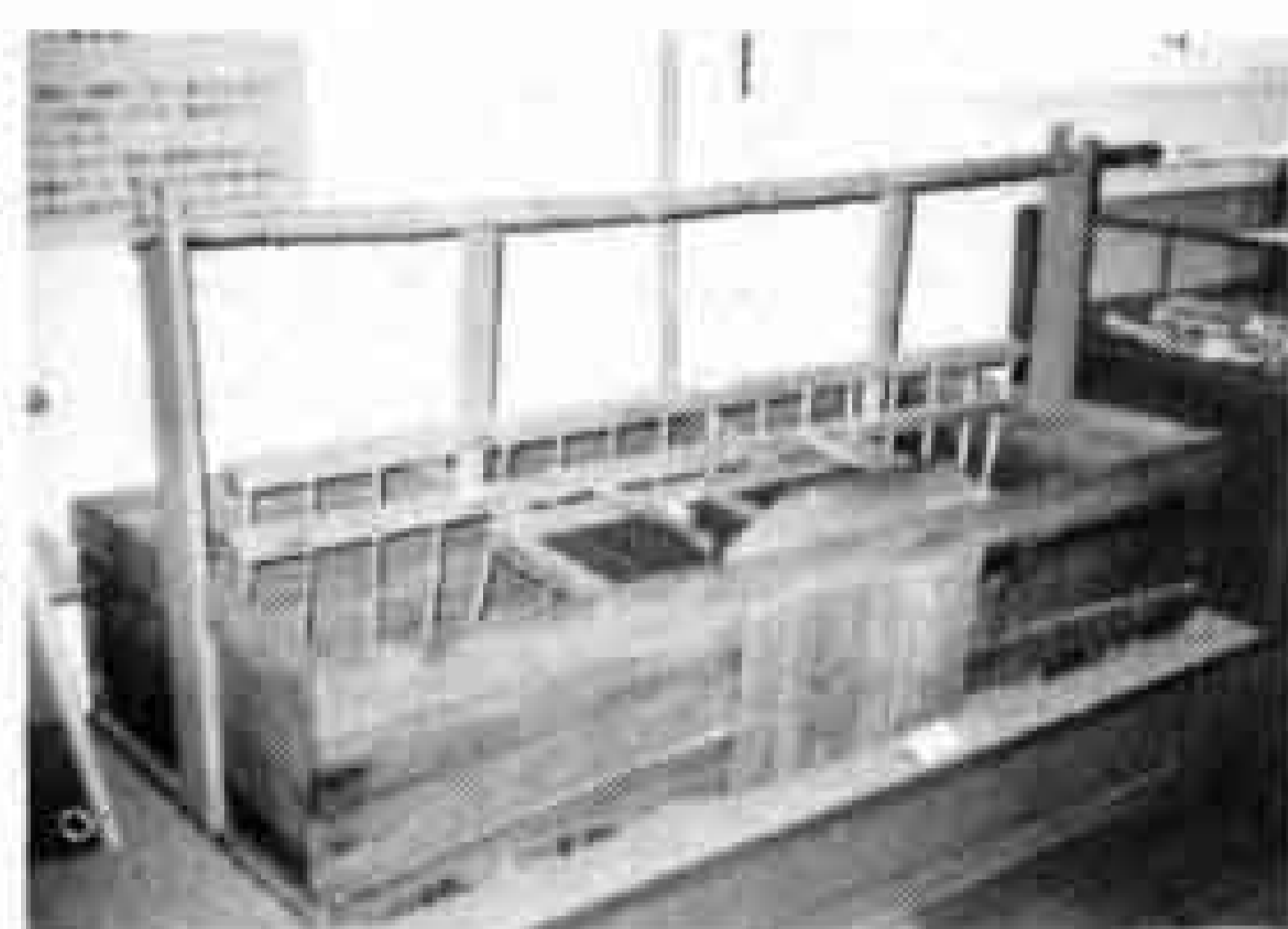


新たな創造 確かな発展  
—はたちの富士市—

## 富士のあゆみ

15

### 製紙工業の発展



▷手すき和紙のすき舟

製紙業は、明治2年（1869年）内田平四郎らが富士山麓の内山にミツマタの栽培を始めたのが発端でした。ミツマタは、根方方面の山村地帯に大栽培されるようになり、富士市域の和紙工業の発達を促しました。

明治12年、柏森貞助らは和田川べりに釣玄社という手すき和紙工場をつくりました。これはこの地域の最初の工場、か性ソーダを使った製紙技術を開発しました。

今泉の芦川万治郎は、明治20年に手すき和紙の工場を泉町（今泉）に建て、改良半紙の生産を始めました。

翌21年には、製紙伝習所がつくられ技術者が養成されました。

こうして、この付近に次々と工場が誕生し、製紙発達の素地がつくられていきました。

（文は、郷土史家鈴木富男氏の著書を参考にしています。）